The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	猿簑ところどころ
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1954, 13, p. 18-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68466
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

猿簑ところどころ

小島吉雄

はしがき

今回は他に奥の細道に関する文章が載るさうであるから、わたくしの方はそれとの重複を避けて、猿簑にをさめられた俳諧の解釈について私見を述べることにする。打ち明ければ、これは昭和十五年の春、九大国文学会誌に載せた旧稿である。しかしそれは九大国文科出身者以外の眼には殆ど触れることなくして今日に至つてゐるやうである。その証拠には、昨今の猿簑注解書を見ても従前どほりの旧解に従つてゐて、わたくしのやうな疑問を提起してゐない。幸ひにして、語文は学界に於て多くの人々に注目していただいてゐるやうであるから、そこで、もう一度かの旧稿を改訂して、ここに登載し、以て大方の識者の批判を仰がうと思ふのである。

一　二番草

猿簑の俳諧の部「市中は」の巻の冒頭に、

市中は物のにほひや夏の月
あつし〳〵と門々の声
二番草取りも果さず穂に出て
灰うちたたくうるめ一枚

といふのがある。いま問題にしようとするのは、このうちの第三、「二番草取りも果さず穂に出て」の句意についてであるが七部婆心録によれば、

「豊年の様なり、今一潤ひあらば千金ならむと門々に話す片側作りの百姓家の並びたる体なり」

といふ。婆心録が「豊年の様なり」といふのは、猿簑逆志抄に「炎暑ゆゑ稲穂もずんずん延び立ちたりという意」と説いてゐるのに従つたものの如くである。七部集打聞にも、

「いつの年よりも暑きに稲のみのりよく穂に出でたる也」

と述べている。爾後、大抵の注解者は、これに従つてをり、幸田露伴氏も太田水穂氏も樋口功氏も結局はこれと同説である。一例として樋口氏の「芭蕉の連句」の説をあげると、

「農夫の常談に真夏の暑き年が実のりよしといひ、又田の草取は水に手足浸して脊を炎天にやかれ、始終腰かがめての難業なれば、最もつらしといへり。まことに聞くだに汗にあゆる心地す。中にも二番草より三番草の間が極暑のただ中ならむ。二番草取りも果さず早くも苗の穂に出づるは豊作の徴なるべし。旱続きに雨待つ体など見るは如何あらむ。」と。太田水穂氏の「芭蕉連句の根本問題」には、更に附加してかういふ文がある。

「一番草は陽暦では七月中旬、二番草は八月上旬頃と見てよい。三番草まで取るのが普通になつてゐる。これは地方によつて幾分異ふ。」

また、これに続けて、

「何となき豊年らしい賑ひの感じが出てゐる。しかし、又一方から考へれば、二番草ごろに穂の出るのは旱魃のためであると解してここを凶年とする解も成立つと思ふ」と。これらを以て思ふに、一番草、二番草の草取り時期をばほぼ固定的な

ものと考へてゐるために、豊年とか凶年とかいふ思ひつきが生じてくるらしいのである。普通、稲穂の出初めるのは、近畿地方を標準にして言へば、八月下旬ごろである。稲の品種によつて出穂期に遅速があるが、出穂期の早い早稲でも八月中旬以前に穂が出るといふことはない。稲はいくら早ばつだらうが、暑気がきびしからうが、大体八月半頃から穂の用意をはじめ、同月下旬に入つて穂が出、九月のはじめ即ち二百十日から二十日頃にかけて花が咲くのであつて、この時期は毎年ほぼ一定してゐる。もちろん、年によつて気候その他の条件によつて出穂期に多少の遅速があるが、半月以上も早くなるといふことはない。だから、炎天のために生長がよくて穂が例年より早く出ると言つたり、早ばつのために早く出ると言つたりしても、それには程度といふものがあるのである。この句の作者去来は京阪の風土を基準にして作句してゐるのであらうから、解釈にもこの京阪地方を標準にとつていいのであらうと思ふが、近畿に於ては大体右の如くである。ところが、草取りの時期を固定的なものと考へれば、太田氏の説に従つて仮りに二番草を八月上旬とすれば、稲穂が暑気のために生育が早くて八月下旬に出る筈のものが八月上旬にもう出初めたといふことになる。殊に近畿地方では二番草を取る標準時期は七月中旬から下旬にかけてであるから、上記諸註釈書の解釈に従へば、京阪地方では七月中に稲穂が出てしまふことになる。しかし、いくら陽気のためだからと言つても、特別の耕作法を講じない限り、絶対に稲の穂が七月中に出るといふやうなことはあり得ない。これは誠に不都合である。思ふに、かういふ不都合は、草取り時期を固定的なものと考へるところから来るのである。草取りといふものは、元来さういふ性質のものではない。田舎育ちの人は誰れでもご存じだらうが、一番草の取りはじめを同時にはじめても、二番草、三番草は、時により家によつて幾分遅速の生じるものである。人手が足りなくて手の廻りかねる時には自然と遅れようし、また雨量が少くて稲田に水の乏しい時には草も多いし、また草取りも出来かねるから、これも亦自然とおくれざるを得ない。また、手がよく廻る時などには、二番草、三番草が例年より速くなることもあり得る。かういふ風に二番草、三番草等には年によつて多少の遅速のあるものであつて、その時期は固定的ではない。従つて、「二番草取りも果さず穂に出でて」といふのは、二番草が何かの事情でおくれてゐるところへ、早稲種の稲が穂を出して来たといふ情態であらう。すなはち、「人手が足りないか、或は家庭に何か事故があつて、草取りが手おくれて、なかなか耕作地全部に行きわたりかねる。それで他家ではもう三番草も終り、四番草の塗り込みも終つて草取りをあげてしまつてゐるのに、此方はまだ二番草を終つて二番草の最中である。そしてその二番草もまだ取り切つてゐないのに、ぽつぽつ穂の出て来た田も見えて来た」といふので、追はれるやうな慌しい気分で、せか〳〵と忙しがつてゐる農家のさまである。前句の暑し暑しと門々の声といふのに晩夏農村の気趣を見付けて、この付句となつたと見るべきであらう。穂の出る頃になると、稲の成熟に損害を与へるといふので稲田へはひることを避けるのが農家の常である。だから、穂の出るまでに草取りの終了を急ぐのである。従つてこの句の趣意はあくまで、早く草取りを終らうとする気ぜはしい気趣にあるのであつて、稲の豊凶を言はうとするのではない。但し、草取りがいくら遅れたとしても、八月下旬の出穂期近くまでおくれるといふことは一寸

あり得ないことである。そこで天気つづきだと、日照度が高くて稲の生長を早め、出穂を幾らか早めるといふこともあり、また早稲品種は出穂期が早いから、この句は草取りがおくれてゐる上に早生種で日照度よく穂の出も例年より早く出たといふことにしないと辻褄があはぬことになる。それにしても、なほ草取りのおくれかたが度にはづれてをり、また穂の出がよほど早くなければならぬ。しかし、前にもいつた如く、穂の出が幾ら早くなつたところで、一週間以上も早くなることはないから、この句には幾分誇張があると見るべきである。要は、農家の気ぜはしげにしてゐる気趣をあらはすのが主眼であり、その気趣をかういふ誇張を以つて言ひあらはしたと言へるだらう。これを農家の気ぜはしい風情と見て、はじめて次の付句「灰うちたたくうるめ一枚」が生きてくるのである。金網などを用ゐず、火の上に直接うるめを載せて焼いたので、灰がついてゐる。それで、そのうるめを手もしくは火鉢の縁などで叩いて灰を落す仕草を大映しにしたのがこの付句である。前句の「取りも果さず」と言つたところが、如何にも田草取りの実情に適合してゐて実に妙手であると思ふが、その慌しい気趣を受けて、その忙しげな情景を「灰うちたたく一枚のうるめ」にクローズアップして来たところも旨い。

――昭和十四年八月二十四日といふ執筆日附のあるこの文の初稿には、右の文のあとに更に次の如き文が附加せられてゐる。すなわち、――

さて、わたくしは、以上のことを学校で学生諸君に話して来て、その夕べである。いつもの如くビールの小瓶を傾けながら、些か得意気にこの話を山妻にすると、山妻は、わたくしの出鼻を挫くが如く、かういふのである。

「それは旱りですよ。旱りで田に水がなくて草取りが思ふやうに出来ず、そのため二番草を取りきらぬうちに、もう穂の出る時期になってしまつたといふのですよ。」

なるほど、この解釈はよいと思つた。水不足といふことにすると、脇句の「暑し暑し」とも非常によく照応するのである。そして、実際水不足のために草取りが出来かねるといふことはよくあることなのである。山妻は文学的な素養も知識も少しもないのだが、根が百姓の娘だから、かういふことになると経験に照らして案外よく分るらしいのである。この夏休みに所用あつて帰省したら、現に今年は雨が少なくて田に水が無く、草取りが出来ぬと言つて老父達は弱つてゐる。そして、少しでも水気のある田は、その干上らぬうちにと急ぎに急いで人手を増して草取りをしてゐるのである。まだ一番草が廻りかねてゐるといふ話であつた。かういふ実際を目のあたりにすると、山妻の説は愈よろしきやうに思はれるのである。それで、わたくしは夕涼みながら、家父にその話を持ち出すと、家父は最初はわたくしのやつたやうな解釈を下した。更に妻の意見を話すと、さういふ風にも考へられるともいふのである。結局、百姓としての立場からは、両方どちらの解釈も成り立つといふのである。家庭的事情や人手不足による草取りの遅延とも、また旱天ゆゑの草取りのおくれとも、どちらにでも考へられるといふのである。尤も、今年のやうに旱りもひどいのになると、稲もこの句のように悠長に穂にも出でて来ないから、この句の場合は、日照り続きで草取り時分にだけ水不足だつたといふやうな事情にしておかねばなるまい。

――以上が、初稿の文である。さうすると、この「二番草」の句は、草取りのおくれた理由として二つの解釈が可能であり、そのどちらにとつても差支へないことになる。要は、穂が出ると田にはひれなくなるから、草取りを急ぐ農家の慌しさをこの句から感得すればよろしいのである。稲のみのりに重点をおいてゐる従来の注解は捨つべきである。

二　油かすりて

「きりぎりす」の巻の脇句

油かすりて宵寢する秋

の「油かすりて」については、諸説あつて一定しない。「かする」といふ言葉の意味が明確でないのである。既に七部婆心録には、「かするといふのはかすり取るの義で燈し残りを油皿から油差しにかすり入れるのである」といひ、燈し残りを油差しに移すのは節約のためであるとするのである。更にまた逆志抄は「かするは涸の意で、油の自然と減つて無くなること」だといふのである。この二説が二代表となつて諸注その何れかに荷担するのである。しかし、逆志抄のいふやうに涸の意味ならば、これは自動詞で「油」が「かする」の主語となるのであるから、普通ならば「かすれて」でなければならぬ。このことは既に先輩の指摘せられるところであるが、この弱点を補強するために、暁臺や幸田露伴氏などの方言説が生じるのである。すなわち、かすれてというべき場合に、かすりてといふのは伊賀伊勢の方言である、故に油の尽きる場合は芭蕉はこのやうに表現したのだといふのである。果して「かすりて」は伊賀方言であるかどうか、まだよく調査してゐないが、たとへ伊賀方言であるとしても、この場合芭蕉がわざわざ一般語でない伊賀方言を使用して連衆の理解困難を将来するほどの心無さを敢へてするといふことが呑み込めぬ。ここの「かすりて」の語は他の連衆にも即座に理解出来る一般通用語だつたといふ立場からまづ解釈すべきではないか。とすると、やはりその語法が問題になる。従つて逆志抄の説は一往お預けとしたい。ところで、芭蕉は自動詞的に言ふべきところを他動詞でいふ語法上の癖がある。たとへば、「伝はる」といふべきを「伝ふ」といひ、「改まる」を「改む」といふが如きである、「かすりて」もまたその例に洩れないと説くものがある。いかにも芭蕉にはそのやうな語法上の癖があるけれども、それは如何なる場合でも然るといふのではない。「る」「らる」の接尾辞の添加せられる場合に限るのである。「横はる」といふべきを「横たふ」といふが如きこれである。だから、「かすりて」の場合にはこの芭蕉の語法癖は当てはまらないのである。

曽て、藤井紫影先生の説に、かすりは倹約することで、先生の御郷里たる淡路では今もさういふ風に用ゐるといふことであつた。北西鶴太郎氏の説だつたかと思ふが、和歌山県の方でもさういふ用法があるといふことである。元禄頃の通用語に、かすりを倹約の意味に使ふといふことなれば、この句の意味は実に簡単明瞭であるが、わたくしは、なほこの方言説を無条件で信じ得ないでゐる。

また顕原退蔵氏の説では「人の事をば三郎兵衛といふべきを三郎、五郎左衛門を五郎などかすりていふ」（好色堪忍袋巻三）とあつて、簡略にすることを「かする」といふから、油をかするは、つまり油を節約することであるといふ。（評釈江戸文芸叢書の俳諧名作集）しかし、この説にも承服出来ない。

今様廿四孝巻四に

「極月廿六夜の月まだ出ぬ深夜業に、か

すりし油たちしまひ、はつとして消ゆる燈火」

とある。この文はかつてわたくしも発見して教室で話したことがあつたが、顕原氏も「かする」の用例の第一番にこれをあげて「これは油入の底までかすつて油皿についだ意であらう」と述べてをられる。この「かすりし油」は、どう考へてもそのやうに解するより外に考へやうのないものである。器物の底に少量しか残つてゐないものを杓子等ですつかりかすり取るに、何々をかするといふは、今もいふことであつて、例へば、「湯をかする」「釜の飯をかする」などといふのは、釜底にある湯とか飯とかを杓子でかすり取ることを意味してゐるので、ここの油をかするといふのも、同様の言ひ方である。その釜底からかすり取つた湯や飯の如きを、「かすり物」又は単に「かすり」ともいふことがあつて「男はかすりを食べると出世が出来ぬ」などという俗諺もある。そこで、芭蕉の句の「油かすりて」も、今様廿四孝の「かすりし油」や右の用例などと同じ意味のものであるとわたくしは考へる。顕原氏が他にあげてゐる数例、たとへば、

賀茂祭、半両の油かするや、ものかづら

ふろあがり、茶がまをかする酒の酔

一釜かする美濃の茎長

等、いづれも、「かすりし油」のカスルと同義にとつて少しも差支へがないやうである。酒の酔に湯茶を節約するでは通じないし、賀茂祭に半両の油が節約せられるといふのも無意味である。半両もの油をかすつて使ふところに面白味があり、茶釜の湯をかすつてなほ渇望するところに風呂上りの酒の酔が生きてくるのである。顕原氏が最後にあげてゐる好色堪忍袋の「五郎左衛門を五郎などかすりていふ」の「かする」と油かするや茶釜をかするの「かする」とはその用法意味が全く別種なのである。語原的にはどういふことになるのか知らぬが、具体的には、堪忍袋にいふかするは掠の義である。油などの場合は器物の底をカサカサ鳴らして底溜を掻き出す動作をいふのである。杉浦正一郎氏の「新註猿簑」の補註に、用例としてあげてをられる「米びつの底かすらぬやうに致せ」といふ芭蕉の手紙文も節約の意味ではなく、米びつに米を無くさぬやうにせよといふ意味と解すべく、「五郎などかすりていふ」のかするとは違ふのである。蓋し、芭蕉の「油かすりて」は「米びつの底かすらぬやう」のかすりてと同意であり、今様廿四孝の「かすりし油」の場合と同じ語意なのであらう。

「かする」をわたくしと同じやうに理解してゐる人に、七部婆心録の著者があり、岡崎義恵博士がある。しかし、七部婆心録は最初にあげた如く、油壺から油皿へかすり入れるのでなく、油皿の底をかすつて油壺へ返すのであると言つてゐる。そこに大変な相違が生じるので、わたくしや岡崎博士の考へでは、油壺の底をかするのである。岡崎博士の見解は芭蕉俳諧研究に示されてゐる。但し、「かする位の一二滴の油をともしたか、それともこれだけの油を燃やしてもとそのままつけずに寝たか、それは句の中に云つてないから立ち入らないことにしたいのです」といつてをられるのは少し物足りない。わたくしの見解では、「かする」に欠乏の意味が含まれることがあるやうに思はれる。たとへば、前にあげた、

半両の油かするやもろかづら

茶がまをかする酒の酔、

米びつの底をかすらぬやうに致せ

などの「かする」には、かする動作と共にその器物には内容の欠乏してゐる意味が添加せられてゐるやうである。「油かすりて」

の句の場合も、やはりさういふ意味のかすりてで、かすつたけれども燈火をともしつづけるだけの油の無かつたことを意味してゐる。

さて、わたくしのこの句の解は、結局次のやうになる。

「秋の長夜、夜なべでもしようと思つてゐると行燈の油が切れたやうである。油を差さうとして油壺を取り出したが、それにもない。かすつてみたけれども一雫ほどしかない。今さら油を買ひにゆくのも億劫だから、えゝまゝよとそのまま寄寝してしまふのである。」

婆心録は、「秋中油をきらすことあらむや」と言つて、かやうな解釈を排斥してゐるが、まだ油があると思つてゐたのに、さてもう切れてゐたといふやうなことは実際の日常生活としてはしばしばあることで、婆心録の考へは寧ろ偏狭である。もちろん、この句を油をきらした体と解する説も昔から時々見えるのであつて、波鷗の七部集講義にも、

「附意は発句灰汁桶の雫やみてきりぎりす鳴くを賤家と見立て油の貯へもなきさまなるべし」

といつてゐる。

それにつけても憶ひ出すのは、わが少時まだランプをつけてゐた頃のことである。笊に灰を入れて桶の上にのせ、その灰の上から笊一杯に水を張つておくと、灰汁が笊の目を通つて桶にしたたり落ちる仕掛けにして、大抵夜の間に灰汁を取つておくのが、京阪地方の田舎家などの習はしであつたが、わたしは、少年時に土間の隅においてある桶に笊から灰汁のポトンポトンと滴り落ちるその音にまじつてその桶の蔭に鳴くこほろぎの物侘びしいとぎれとぎれの声を聞いた秋の夜ごろを「灰汁桶の雫やみけりきりぎりす」の句から、まざまざと憶ひ起すのである。そして、中学の時分までつけてゐたランプの、石油が切れて火の消えほそる時、石油差しを取り出して油を注がうとすると、それにも油がなくなつていて而もわざわざ石油罐を開けて石油を出しにゆくのも億劫で、明日の予習をも中止してそのまま寄寝してしまつたことなどを、また「油かすりて」の脇句から聯想するのである。芭蕉の灰汁桶は、わたくしの知つてゐる灰汁桶とは、その構造に於て違つてゐたらしいけれども、その灰汁桶の雫のかもし出す気分情調といふものは同じやうなものであつたであらう。

もちろん、この「油かすりて」の句には気らくな、そして幾分無精な、超俗的な生活気分が溢れてゐることを認めるべきである。

因みに云ふ。婆心録に油皿より油壺に残りの油を移しかへすを節約のためだとしてゐるけれども、燈し残りの油を油壺に返しておくことは、当時としては一つの常識であつて、必ずしも節約を意識しての動作ではなかつたと思はれる。従つて、秋の夜のわびは、油皿より壺に油を返す場合よりも、油壺をかすつて皿に移さうとして油のなかつた方により濃厚である。

—大阪大学教授—